

【本の紹介】

『笑う角田には福が来る——訪問看護で出会った人々のきらめく16の物語』

(へるす出版、2009年。1260円)

角田ますみ



自分で、自著を紹介するというのは実に面映ゆいことである。でも、たまにはこういうのもいいじゃないですか、という編集メンバーの言葉にうっかり乗せられて、この原稿を書くことになってしまった。バイオエシックスとは全然関係ないじゃないかという呟きも聞こえてきそうだが、そこはほんの少しこらえていただき、気持ちを緩めてお読みいただけると幸いだ。

本のタイトルに自分の名字を入れるという厚顔な（厚顔なのは著者である私だが）この本は、『臨床看護』という雑誌に「笑角来福—笑う角田には福が来る」という題名で連載してきたエッセイをまとめたものである。最初は訪問看護の話で連載をとお願いされていたが、そのうちどんな話を書いてもいいよということになって、無法地帯よろしくどんどん好き勝手な話に発展していつってしまった。そんなお話たちの主人公たちは、ラブホテル街

に毎日立っている無表情な客引きのお兄さんたちだったり、日本人の夫を亡くした後、日本語だけを忘れてしまった在日韓国人のおばあさんだったり、不器用で何もかもヘタクソな三十男が見せた親友への思いやりだったり、高慢ちきで口うるさい女医が思わず見せた涙だったり、認知症の男性が最後にしてくれた約束だったり、家出少年が海外から六年後に寄こしたメールだったり、ホームレスの男性と認知症のおばあさんの友情だったりする。

この人たちは、本書の前書きにも書いたが、何も特別な生き方をしている人達ではなく、それぞれの場所でひっそりと、笑ったり泣いたりしながら懸命に自分の人生を送っている人々だ。それこそ、バス停や駅のホームでたまたま隣りになった誰かのように、日常のどこにでもいるような普通の人々。それでも、それぞれに小さなドラマを抱えていてその積み重ねが日常となり、ひとつの人生になる。でもその人生というのは本当にままたまなもの、時として理不尽で、曖昧で、ちっとも楽なんかじゃない。私たちは、かなり荒っぽい大海原に放り出されたみたいに、様々なめぐり合わせや運によって翻弄されながら、

必死に渡っていこうとする小さな船みたいなものだ。海と船を人生にたとえるなんて、少しベタで申し訳ないけれど、船を構成する鉄は海水とまったく相性が合わないものだから、海にいれば錆が出てしまう。だから、船を操る者は、錆が内部に侵入する前に削り落とし、上からペンキを嚴重にかぶせるという日々の手入れが必要となる。船乗りというものは、決して冒険者でも賭博者でもない。雑草を取り除き土を整える農夫のように、海に在ることの危険を少しでも減少させるために、こうした弛まぬ努力を繰り返す存在である。それにもかかわらず、船は時として沈むのだ。

この本の主人公たちも、決して語るべきエピソードの多い華やかな人生ではないけれど、大海原を航海する船乗りのように、日々を懸命に生きている人たちである。それは、自分の人生を自分で決めるという大それた強い意思とまではいかななくても、「こうなったらいいな」「こんなふうに生きれたらどんなにいいだろう」というささやかな希望を持って、人生をたゆまず生きている市井の人々のたくましい姿そのものである。しかしその努力にもかかわらず、船と同様に人生も時として沈んでしまう。それでも、人は人生という荒海に出て行くのだし、なるべく長く海のそばに、海の中にさえ、いてみようとするのだ。

研究に疲れたり、理論や理屈を机の上で転がしているのに飽きた時、私は、今でもこの本の主人公たちに逢いたくなる。そんな人々の物語である。

(すみた・ますみ 東邦大学医学部)